採鉱　運搬

50まいん

大斜坑（だいしゃこう）粗鉱ビン（そこう）

別子銅山最後の挑戦
海面下一千メートルへの奇跡

端出場全景
昭和45年撮影　別子銅山記念館所蔵

大斜坑（だいしゃこう）は、海面下約1,000メートルに及ぶ大坑内運搬路です。

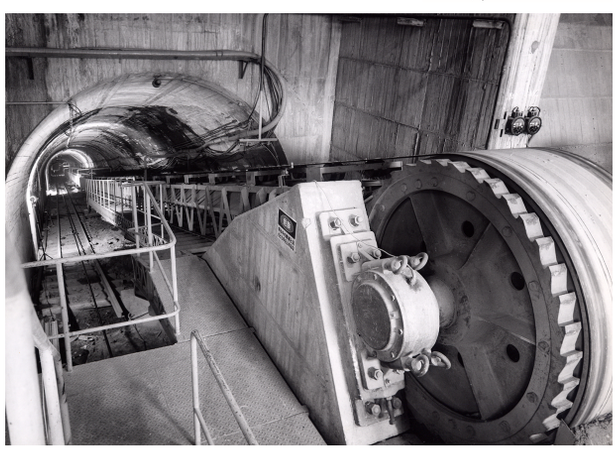
開坑以来270年を経た別子銅山が老境に入り、鉱脈が下部に移行してきました。

そこで、大斜坑を開削することを中心とした深部開発が策定され、昭和35年(1960)9月に大斜坑の開削が着手されました。

昭和38年に計画の一部を変更、当初よりもさらに延長され、工期8年、19億5,000万円の建設費を要して、昭和43年9月に完成しました。

端出場の打除(14番坑道準、海抜約160メートル)から約15度の傾斜で、延長4,455メートル、海面下約1,000メートルに達しました。坑口の標準断面の高さ3.35メートル、幅4.3メートル(カマボコ型)でした。これまでの三つの通洞に勝る、まさしく別子銅山の最後の望みを託した大開発でした。

大斜坑の完成により、鉱石はすべてスチール・コンベアーで運ばれ、46人乗りのケーブルカーも走るなど、人や機材の運搬に大活躍しました。


大斜坑スチール・ベルトコンベヤー
昭和44年撮影　別子銅山記念館所蔵

建設中の粗鉱ビン
撮影年不詳　別子銅山記念館所蔵

粗鉱ビン（そこう）は、地中深く大斜坑から運ばれた鉱石を一時貯蔵していた貯鉱庫です。4,000トンの貯鉱能力がありました。

ここで、貯蔵された鉱石は、さらにスチール・コンベアーで足谷川を渡り、選鉱場へと運ばれました。

現在、これら両者はマイントピア別子端出場ゾーンから望むことができ、打除の山斜面にある四角いコンクリート造りが粗鉱ビンで、その向かって左側に繁みにかくれた中に大斜坑の坑口があります。

現在の大斜坑と粗鉱ビン跡

http://nmh.hearts.ne.jp/k/gaidobook/050/index.htm